

「十字架上の主」

マルコによる福音書15章25-32節

森島 牧人 牧師

今日もマルコ福音書15章を読んでいきたいと思えます。前回、新共同訳聖書の本文にマルコ15:28はなく、その末尾に異本による訳文として「こうして、『その人は犯罪人の一人に数えられた』という聖書の言葉が実現した。」という文章が掲載されていること、そしてこのことにはこの文言がここにあることに疑問を持つ聖書研究の専門家が存在があることを学びました。しかしこの御言葉には、この世での主イエスの御業の意味が非常に明瞭に示されていること、すなわち聖書が私たちに証ししていることを一言で言うとするならばそれは、イザヤ書53章の「イエスがこの世にお出でになったのは罪人のひとりに数えられるためであった。」というこの言葉になると、明確にしておきたいからです。

さて、今日はマルコ15章の後半で、ここで重要な事は、人々が主イエスの十字架の出来事を軽蔑したということです。神の子が罪人として数えられたことが、主の十字架の意味であり、聖書の中心であるのですが、しかしそれを語る聖書は、それと同時に人間がそれを軽蔑したのだと言うのです。15:29には「そこを通りかかった人々は、頭を振りながらイエスをののしって言った。『おやおや、神殿を打ち倒し、三日で建てる者、十字架から降りて自分を救ってみろ。』」とあります。さて、ここで人々が主をののしるのに使った主イエスの言葉、「神殿を三日で建てる」とはどういうことだったのでしょうか。

当時、ユダヤ教では罪のある者は神殿に入ることも神に近づくことも出来ないことになっていました。ですから神殿がどれほど壮麗であっても、罪人を悔い改めに導く場所ではなかったのです。そこで、今までとは違って、罪人であっても喜びを持って安心して神を拝むことの出来るような神殿にする、それも三日でというのが、主イエスの「神殿を新しくする」ということでした。主イエスは、人間が正しく神を拝むことの出来るように、ご自分の体を神殿として、罪人である人間に与えようとしていたのです。

また当時のユダヤ教では、神殿で神を拝む時、犠牲として傷のないけものをささげるといふ決まりがありました。新しい真の神殿で、人々が神を拝むためにささげられる真の犠牲とは…。そうです、それは罪のない神の独り子こそ、最も意味のある犠牲でした。主イエスは罪がないにもかかわらず、しかし罪人のひとりに数えられて、その身を神の前にささげようとしていたのです。つまり主イエス・キリストは、罪人である人間が真に神を礼拝し、生かされるための真の神殿を建てるために、御自分を罪人のひとりとして十字架に付けられ、犠牲として殺される必要があると語ったのです。

神の子・主イエスが自分たちのために、罪人として死のうとされているにもかかわらず、人々はそれを全く理解せず、「三日の内に神殿を再建するのなら、十字架から降りてやってみろ。」とものしったのです。しかし、彼らの言う神の子としての力、十字架を降りることによって見せるというのとは全く逆のことが、この時神の子の力として行われようとしていたのです。

15:31に「同じように祭司長たちも律法学者たちと一緒にあって、代わる代わるイエスを侮辱して言った。『他人は救ったのに、自分は救えない。メシア、イスラエルの王、いますぐ十字架から降りるがいい。それを見たら、信じてやろう。』」とあります。当時の宗教界の中心的な存在であり、旧約聖書を最もよく理解しているはずの人物たちが、人々と同じことを言って主イエスを軽蔑したというのです。まさに主イエスがなされようとしている神の出来事と人々とのギャップが、ここに鮮やかに描き出されています。この部分は非常に重要なところで、祭司長・律法学者らは旧約聖書の信仰を十分に分かっているが、なおキリストの中に見ようとしたものは聖書の神の御業ではなく、魔術的、奇跡的な神の力だったのです。

この神の力については、私たちの信仰生活の中でも考えなければならないことです。罪がないにもかかわらず、罪人のひとりとして十字架にかかれた主イエス、そしてその神の業を理解出来なかった人々…。さて私たちはどんな力を神に求めているのでしょうか。そんな中で今年度私たちは年間の主題聖句として「安らかに信頼していることこそ＜力がある＞」という御言葉を与えられました。この一年、主イエスの体なる教会の一人として、＜神を信頼する私たちにこそ力がある＞という事とは具体的にどういうことであるかを祈りつつ、考え、歩んで行きたいと思えます。

(説教要約 羽入田悦子)